

# ジャグパル

JugPal

2006年1月2日 第32号



## インタビュー

【目黒 陽介 さん】

最近十代、二十代の若いジャグラーたちの活躍がめざましく、彼らは驚異のテクニクと共に新しい大道芸のスタイルを我々に見せてくれます。今回はそういった若手ジャグラーの中から「目黒陽介さん」にお話を伺いました。目黒さんにお会いして最初の質問は、

「ウェストは何センチ？」でした。(笑)

なぜって、日々膨張を続けるお腹を持つオジサンは、彼の演技を見るたびにそのウェストのスリムさが気になってしょうがなかったのです。(アホなおやじ)



目黒 陽介 さん

### ジャグリングとの出会い

テレビの影響というのは侮れません。と言うのも「TVチャンピオン(TV東京)」がテーマとしてジャグリングを取り上げなかったら「ジャグラー目黒陽介」はいなかったかもしれないからです。彼がジャグリングというものを知ったのは、1991年11月放映のTV番組「TVチャンピオン(全日本ジャグラー王選手権)」を見てからのことでした。この番組は5人のジャグラーが、ジャグリングのテクニクやパフォーマンスを披露して競い合い、チャンピオンを決定するというもので、これだけまとまってメディアでジャグリングが紹介されたのは日本では初めてのことでした。彼自身はそれまでは友達がやっていたディアポロの存在は知っていましたが、特に自分でやることもなく、この番組でボールやクラブやいろいろな道具があることを知り、「ジャグリング」という芸能に興味を持ち、翌2000年15才の時に練習をし始めます。



しかし、その練習方法が実にユニークで、インタビューの際にえっ、えっと何度も聞き直し確認してしまいました。

その方法とは、録画した「TVチャンピオン」のビデオを繰り返し、何回も何回も見て番組で演じられた技をひとつひとつこなしていくというものでした。友達と一緒に練習することもあったそうですが、ほとんど独学で会得したとのことでした。

これを契機にジャグリングの練習を本格化していくのですが、その頃プロになろうという目標があって練習していた訳ではなく、ただ練習自体が楽しくて一日中それこそ朝から晩まで練習していたそうです。

## プロへの道

練習漬けの毎日でしたが、特にプロになることを意識していた訳ではありません。

プロを意識し始めたのは、東京都ヘブンアーティストの資格審査を受けることがきっかけで、審査自体は2回目のトライで合格しました。2003年9月のことでした。練習についてお伺いしました。



Q: プロになってからの練習と、単純に好きで練習していた頃の練習とを比べると違いはあるのでしょうか。

A: 全然違いますね。

もちろん練習すること自体は楽しいけれど練習の仕方が変わりました。人に見せるようになって、つまり人に見せることを意識し始めてからは変わりました。それは上手くなるための練習とは異質なものだと思います。

具体的に言うと、ボクは安定感が無いのが嫌いなので、練習する技の種類が減りました。つまり本番でやる技(ショーで使っている技)を中心に練習するようになったんです。また練習時間も3~4時間と減りましたね。披露するテクニックも今は難しくハードなものが多いので、以前のようにそれこそ一日中(7~8時間)は練習できません。

でもプロとなった今から考えると、ジャグリングの練習に没頭して、ただただひたすら損得抜きで、好きで好きで何時間も練習していたあの頃は貴重な経験だったと思います。ああいった時間も必要だったんだと。

今は練習メニューを自分なりに作って、その時の状況に応じて変更して練習しています。また以前は人ができていると悔しくて(その技を)練習したけれど、今は焦りません。

## ショーの構成

目黒さんのパフォーマンスの特徴の一つにルーティンの変則性があげられます。

普通はボールならボールの演技が終了したら次の道具に移り、かつ同じ道具の演技内では道具の数を徐々に増やしていくなど難易度を上げてショーを盛り上げていきますが、目黒さんの場合は、ボールの後にクラブを演って、その後にもたボールに戻ったりと、道具も入れ替わり立ち替わり、難易度の順序なども一見バラバラで、よく見慣れたジャグリングショーのパターンではありません。

Q: なぜそのような構成なのでしょう？

A: いやー、それもありませんか。(笑)

特に深い意味はないけれど、あまりきっちりとした型にはまった演技はしたくないんです。うん、そういうのもありますよ。



確かに彼のショーは喋りもなく、ある意味淡々と進められていきますが、観客の反応をみてみましょう。もちろん目黒さんのテクニックを学ぼうとマニアはいつも周辺にいますが、それ以外におじいちゃん・おばあちゃんから小さいお子さんまで幅広い年齢層の方々が集まり、皆さん実にいい顔をしてそれぞれの思いで演技を楽しんでいます。

なんて言うのかなあ、目黒さんが創り出す穏やかで優しい、誰でも受け入れてくれる、そんな雰囲気(空間)と安心感に惹かれているのでしょうか。

Q: ショーの全体構成は誰が考えているのですか。

A: ほとんど自分で考えています。音楽も自分で決めているし、その音楽にあわせた演技の構成はほとんど一人で決めています。うん、好きな曲にあわせて演技をするのは凄く気持ちが良いです。

## ダンス

目黒さんのパフォーマンスのもうひとつの特徴に、身体のしなやかな動きがあげられます。

Q: ダンスを習っていたそうですね。

A: 自分というのを見てもらう、自分を表現するためにはジャグリングをやっているだけではだめで、ジャグリング以外のことも必要だと感じたんです。なぜダンスなのかというはっきりとした理由はありませんが、ダンスはもともと見ているのが好きだったんです。



## 気になるジャグラー

Q: 目黒さんに一番影響を与えたアーティストって誰でしょうか。

A: 金井圭介さん。金井さんはオレに何かを与えた人。2003年スタジオPACでの公演「星屑のヴォワイアージュ」でのカンパニーオキハイクダン(金井圭介、セバスチャン・ダルト)のパフォーマンスを観てショーに対する考えが変わりました。それほど衝撃的だったんです。何しろそれまでは喋りを入れたいいわゆる大道芸的なパフォーマンスをしていたけれど、これ観て純粋に、あぁいいなぁと思いました。今までの自分のショーを根底から変えたのがこの公演だったんです。

Q: 金井さん以外に気になっているジャグラーはいますか。

A: ジェローム・トマ。好きなジャグラーは一杯いるけれど、今一番気になっている人ですね。遊びと言うかくずせる部分があって、繊細なところもあり、パァーッと派手なところもあって、観客が心を動かされるのは彼のこういった演技なんだと感じます。できればフランスへ渡って、彼に弟子入りしたいですね。

## これからのショー

Q: これからどんなショーをやりたいですか。

A: 一人で一時間位のジャグリングショーをやりたいな。それはジャグリングからは離れずにいつも何らかのオブジェと触れ合いながらのショー。

そういったショーで、泣かせるジャグリングをやりたい。ジャグリングは表面的な技を見られがちだけれど、テクニック以外のところを観客に感じさせるような、そんなジャグリングをやりたい。

受け手の感じ方によって解釈の仕方が多様になるようなそんな演技で、表現を押しつけないんです。観客に想像というか妄想、そう妄想を抱かせるような。そうそう、「エロく」がショーのテーマ。(笑)



## ジャグリングと目黒陽介

Q: 目黒さんはジャグリングを始めた15歳の頃には、特に何の目標も持たずに無為な毎日を過ごしていたとのことですが、ジャグリングを始めて現在プロとなった今、何を感じますか。

A: ジャグリングに関しては今のところやりたいことはやっているし、これほど自分にあっているものはないですよ。本当にやりがいと言うか生き甲斐を感じます。練習している時は人前でやるような人間だとは思っていませんでしたけれどね。(笑)



冒頭にも言ったように目黒さんのような実力ある若いジャグラーが、今までにない新しいショーのスタイルを模索し披露する中、日本のジャグリング界は確実に次の新たなフェーズに入ったような気がします。

実はインタビューの席では目黒さんのマネージャさんにも同席いただき、三人で大いに話に花を咲かせました。二人の掛け合いはオジサンにとっては結構ウケました。特に目黒さんの口から時折もれてくる“言葉”は実にユニークで面白いし、それに対するマネージャさんの突っ込みのタイミングもバッチリ！本当に楽しいひとときでした。

お二人はしっかりとアーティストとしての次のステップアップを見据えて実行に移されています。

“ジャグラー目黒陽介”の一年後、二年後、そして十年後が楽しみだ！！

[参考] 目黒陽介オフィシャルウェブサイト: <http://www.meguroyosuke.com/>

[安部 保範]

### 早めの編集後記

皆様、あけましておめでとうございます。昨年はいろいろお世話になりましたが、今年も無理をしない程度でジャグパルの発行は続けたいと思っておりますので、応援の程よろしくお願い致します。

昨年2005年は、私個人としても想定外のことが起き慌ただしく、仕事の方もゲップが出るほどの満腹状態でしたが、実に多くのパフォーマンスを楽しみました。数え方にもよりますが、実に50ほどのパフォーマンスを観るためにアチコチと足を運びました。この業界とは無縁の会社で働いていることを考えるとかなりの数かとは思いますが、ほとんどパフォーマンスを観るといっては私にとってストレス解消手段になりつつあるような気がしてきました。(汗)

今年は一体どんなパフォーマンスやパフォーマー(芸人)に遭遇するのだろうか。それが楽しみで止められない。

ジャグパルは私という一個人が野次馬根性丸出しで、単なる趣味として発行して、特定の企業、団体あるいはパフォーマー個人に関係しているものではありません。

編集発行人: 安部保範(神奈川県横浜市栄区 在住)

Webサイト JugPal<<http://www.chansuke.net/jugpal/>>

見世物広場<<http://www.chansuke.net/>>

E-mail: [misc@chansuke.net](mailto:misc@chansuke.net)



# ブログ風アート見物記

【10月～12月分】

武春たっぷり 弾き語りのすべて (10月7日/横浜にぎわい座)

国本武春、浪曲師。ただし曲師無し、演台無し、着物は着ない。三味線を手にロックありブルースありカントリーありと、彼曰く「ゆる～い浪曲の定義」の中、自由奔放に語り芸を披露。観客とのインタラクティブな掛け合いも楽しく愉快で大笑い。ライブならではの充実感を堪能し、これをきっかけに彼にハマる。(10月～12月にかけて計5回公演に通う)

ヘブンアーティストTOKYO (10月15日/上野恩賜公園)

新しい大道芸のスタイルを追求し実践している若手(目黒陽介さん、伊藤祐介さん、ハードパンチャーしんのすけさん等)を中心にみる。彼らのこれからが楽しみだ。

国本武春の観客養成講座 てりんぐ2005 その2

(10月17日/ニッポン放送スタジオ)

スタジオ内で椅子を並べて観客は百人程度で一杯。観客を巻き込んでたっぷり語り芸を披露するが、笑いばかりでなく、ベースは浪曲ゆえ親子愛、夫婦愛あるいは友情とかそいった“人間っていいなあ”という情を謳いあげる。若い人にも十分に伝わるように音楽や言葉や節回しなど、よく考えられた観客参加型パフォーマンス。

三茶 de 大道芸 (10月22日/三軒茶屋駅周辺)

あいにくの小雨模様。加納真実さん、目黒陽介さん、ちゅうさん、球斗さんを楽しむ。球斗さんのオリジナル・球体ジャグリング(透明の球体の中でボールを操る芸)は久しぶりだが本当にユニークで何回観ても釘付け。

杉山兄弟のスーパーシャボン玉ショー

(10月29日/栄区Y小学校)

シャボン玉をショー仕立てにして、数々のシャボン玉記録を持つ世界的なシャボン玉アーティスト・杉山兄弟。自宅近くの小学校での親子対象の公演があると聞きつけオジサンひとりだけが駆けつける。相変わらず兄の毒舌と弟の超技巧によるシャボン玉造形と役割分担がはっきりしていて、観客をステージに上げた際のイジリには場内大爆笑。シャボン玉による数々の珍しい芸には観客の大歓声、無数のシャボン玉が場内に満ちた時には子供達は狂喜乱舞。ショーの最後の兄・弘之さんの子供達へのメッセージ。「自分の好きな事があれば、それが人のやらない事でも一日一時間でも続けていきなさい。SMAPの歌ではないけれどオンリーワンを目指して！」生きた言葉だ。

空中サーカス デュオソラリス (11月1日/横浜にぎわい座)

空中芸を中心として前半は屋内、後半は屋外へ出てのサーカスパフォーマンス。演者のブルノーさん、マリーズさん共に45才以上なのに、見事な空中演目を2～3つ、この一回の公演の中でこなされていたことに驚き。凄い体力。普段から努力されているんだろうなあ。他にはクラウンの橋本フサヨさん、ジャグリングと綱渡りではらつとムさん、コントーションでクレールさんが出演。

静岡大道芸フェスティバル (11月3日/静岡市駿府公園周辺)

ヨーヘン・シェルさんにジャグパル(第32号)インタビューに応じてくれたお礼をするために向かう。2回観たがどちらもエンディングのパフォーマンスが失敗してかなり落ち込んだ様子。お土産を渡してしばしお話しして、「気にしないで。観客は貴方を愛していますよ。」と訳の分からないことを言って他のパフォーマンスを観に走り回る。池田洋介さんは初めて観たが、確かに噂通り彼らしく細部までにこだわった内容に好感が持てた。クラウディウス・シュベヒトさんのジャグリングを観て背筋がゾクッと、久しぶりにジャグリングのスリリングさを味わい声をあげる。この快感がジャグリングの醍醐味、原点とも言えるかも。



ヘブンアーティスト TOKYO



三茶 de 大道芸



杉山兄弟 シャボン玉ショー

サーカスシアター ピンゴ (11月3日/静岡市駿府公園やすらぎ広場特設会場)

こ、これは大収穫。4月に観たサーカス・シルクールと共に今まで体験したことがないような新しいタイプのサーカスを楽しむ。ショーが始まってすぐに「ここはどこだろう？」とまるで欧州かどこかのサーカステントの中にいるかのような錯覚に陥った。それほどにスッとピンゴの世界に入り込んでしまい、自分の意識がぶっ飛んだ瞬間。もう一度観てみたい、できれば活動拠点であるドイツのキャバレーで。

高橋さとみ 個展 (11月4日/港区南青山 Pinpoint Gallery)

日本ジャグリング協会機関誌 SWJ? の表紙を毎号飾っている高橋さんの個展。3回通ってようやく本人とお会いできた。彼女の作風と同様ユニークで楽しい人だ。

国本武春の観客養成講座 てりんぐ2005 その3 (11月21日/ニッポン放送スタジオ)

TV収録が入っていて、後日放映されたTV番組を見てみると満面笑みの見慣れたオッサンが映っていた。

横浜トリエンナーレ2005 (11月26日)

トリエンナーレって何? 「金かけた学園祭」って感じ・・・、でも盛り上がっていない。

“(以下パンフより) 静的な美術鑑賞の場としての展覧会ではなく、作品も時間の経過やコミュニティとの関わりから刻々と変化し、動き続ける展覧会を目指します。サーカスのようにいろいろなものが次々と飛び出し、見る側と見せる側が一緒になって様々な体験を重ねていく「運動態としての展覧会」それが、今回のトリエンナーレの特徴です。”

ふ～ん、そうなんだ。皆さんこの趣旨を頭に入れてお読み下さい。私は地域でパフォーマンス活動等をしていますが、市の方針なのででしょうか経費削減の名のもと地域コミュニティ活動に関わるリソース(人、金、時間)が、年々もの凄い勢いで削られていることを傍目でみて知っています。そんな状況下で活動するスタッフの皆さん(主にお母様方)のご苦労には頭が下がる思いです。イベント経費等はそれこそ大げさではなく、十円単位で予算を気にしなければなりません。従って子供達を楽しませるための遊具や飾り付けなどは新聞紙や段ボール等の廃品を利用しての手作りがほとんどです。それでもスタッフは、毎回毎回工夫を凝らして創作し、来場した沢山の親子連れは大喜びで楽しんでいきます。面白いことにそういったスタッフが作った「遊技場」と同じようなものが、トリエンナーレでは「芸術作品」として展示されていたりします。そうなんです、ゴタゴタご託を並べて大金をはたいて大がかりなイベントを開催するまでもなく、どこにでもあるごくごく小さな地域で、もう何年も何年も前から普通の市民達が既に「運動態としての展覧会」を具現化しているのです。そんなことを市長以下役所に棲む方々とお偉いプロデューサー? 始め芸術家の皆様方は知っているのだろうか。このコンセプトを掲げるんだったらもっと足元(実生活)を見るよ。徐々に呆れています、私。

「BankART Life - 24時間のホスピタリティー」展 (11月26日/ BankART1929)

ル・クブル・ノワールさんが「ヌーヴォー・シルクの部屋～ジェローム・トマ～」という空間を展示しているのでお邪魔して、しばしジェローム・トマのビデオを見ていた。

武春のにぎわいバラエティ (12月1日/横浜にぎわい座)

国本武春をトリに3バカヘッズさん、三増紋之助さん、ポカスカジャンさん、林家二楽さんが出演。武春さん目当ての観客はノリが良いし、寄席ならではの盛り上がり有り。寄席だから酒も入っているし。紋之助さんは客席まで降りてきて風車の芸を披露。観客の頭の上で独楽が回って皆キャーキャーわめいて喜んでた。

目黒陽介 (12月3日/横浜相鉄ジョイナス)

街は既にクリスマスモード。大きな美しいツリーの前での彼の緩やかで穏やかな演技が映え、買い物客の足を止め、皆微笑みながら温かな雰囲気の中、演技を楽しんでいた。

ハーレム・ゴスペル・クワイア クリスマスコンサート (12月6日/鎌倉芸術館大ホール)

いやいや楽しいコンサート。迫力あるよなあ、心に直に響いてくるから凄いよなあ。立てや歌えや踊れや掛け声かけるやと、いろんなことやらされたけど観客全員総立ちで楽しんじゃいました。のせるの上手いし。

ダメじゃん小出 負け犬の遠吠え Vol. 13 (12月13日/千代田区立内幸町ホール)

もう13回目なんですね。いつもながらの鋭い視点からえぐった時事ネタの数々。気に入ったネタはいくつかあったけれど、でも今回はいつものような軽快なテンポが感じられなかったのは何故だろう。

国本武春の観客養成講座 てりんぐ2005 その4 (12月19日/ニッポン放送スタジオ)

もうだいぶ慣れてきたぞ、武春ワールドに。現代における浪曲をどう伝えていくのか、先人達による完成された芸を今の時代、一体誰が聞くんだという状況の中、彼は積極的に寄席を出る機会を設けて活動している。そんな中で、彼は先人達が苦労して完成させた芸をまねるのではなく、彼らが何も無いところから創り上げていったその過程での心意気や気持ちをたどる作業をしている。いわば芸をパーツパーツに分けての作業では、完成された浪曲という芸能の素晴らしさに改めて驚嘆するそう。あくまで彼は浪曲師が原点、そしてその核があってからこそその芸の広がり遊び。皆さんも是非“国本武春”体験を。

[安部 保範]